

# フィリピンとの掛け橋

第9号 日本聖公会九州教区宣教局フィリピン協働委員会発行

2006年4月16日

## ワークキャンプ特集



3月6日(月)反省会で記念撮影

## 今年は教区から8名を派遣

九州教区は、協働関係にあるフィリピン中央教区へ、2月28日(火)～7日(火)、3回目のワークキャンプのために8名を派遣して、同教区のマガラネス市にあるホーリーイノセンツ教会とインファンタ市の伝道所の2箇所に分かれて働いた。尚、これには東京聖三一教会から加藤望兄も加わって、協働関係が広がった。教区報5月号にも報告するが、各自の感想などをここにまとめて報告する。

**参加者** 小林史明司祭(団長・熊本)、中村正司祭

(大口)、(以下五十音順に)江口聡子(熊本)、岡積鉄男(鹿児島)、沖本恭子(久留米)、坂本瑠美(熊本)、松山省太郎(戸畑)、宮崎光平(大口)

## キャンプ日程

2月28日(火)

午前10時10分福岡空港発、中華航空で台湾乗換え、午後3時50分(現地時間・日本より1時間遅れている)マニラ空港着。寄贈するギターを途中で購入し、フィリピン聖公会のホレブハウスに宿泊。

1日(水)

聖アンデレ神学校で行われた大斎始日(灰の水曜日)の礼拝に出席し、ホーリー・イノセンツグループ(以下HG)とインファンタグループ(以下IG)に分かれて各キャンプ地へ向かう。IGにはタクロバオ主教が車で案内くださり、一昨年秋の侵食による被害跡を説明。

2日(木)

HGは、教会の回りの整備作業。IGは、購入地の草刈作業。

3日(金)

HGに、タクロバオ主教、ダグソン執事が加わって作業完了。IGは、土が運ばれたが、雨のため、地ならし作業は途中で終わった。

4日(土)

HGは創立1周年礼拝。その後クライスト・ザ・ロード教会を訪問。バタンガス市を観光後タガイタイ市のレオン司祭宅へ宿泊。IGは、ドゥマガ民族の村ルバヤを訪問。夕食は加藤氏の指導で感謝の食事会を用意。

5日(日)

HGは、警察学校での礼拝と聖バルナバ教会の主日礼拝。IGは、信徒宅で主日礼拝。それぞれ帰途につき、夕食は、マニラの踊りと歌のレストラン。ネッド司祭の家に招かれる。

6日(月)

朝食後、サンチャゴ要塞やカトリックマニラ大聖堂を見学する。ハリソンプラザで昼食、買い物。夜、夕食の後、反省・送別会で、ひとりひとり感想を述べる。そして各参加者に記念品をいただく。

7日(火)

朝食後、午前10時45分マニラ空港発、中華航空で台湾乗換え、午後7時20分福岡空港着。

## キャンプの前と後

尚、2月10日(金)～11日(土)、参加者による準備の話し合い。そして3月19日(日)参加者とフィリピン協働委員との報告反省会。それぞれ、熊本聖三一教会で行われた。

## 目次

### 参加者の感想文

三回目のワークキャンプ	小林史明	2
満面の笑みとフィリピンの青い空を感じて	江口聡子	4
キャンプ日誌	岡積鉄男	5
フィリピンへ行ってきました。	沖本恭子	7
フィリピン ワークキャンプレポート	加藤望	8
フィリピンワークキャンプに参加して	坂本瑠美	10
フィリピンワーク	松山省太郎	11
フィリピンワークキャンプ	宮崎光平	12
九州教区フィリピンワークキャンプ感想文	中村正	12
(教育担当) シャロンさんからのメール		15
今後の展望とお知らせ		16

## 三回目のワークキャンプ

司祭 フランシス 小林史明



(3月4日・土 インファンタの市場で)

2004年から、毎年実施してきた、フィリピンワークキャンプも、今年で三回目になりました。春に我々が日本から訪問するだけでなく、秋にはフィリピンから聖職を招いて交わりを深めているので、ふたつの教区、ふたつの国が身近な存在になってきたように思います。特に昨年の秋には、シルベスター・ダグソン執事を迎えたこと、彼の妻であるシャロンさんは、フィリピン中央教区のキリスト教教育の担当者であることなどから、執事の滞在中からしばしばメールでやりとりをしてきました。

(教材の支援)

今回のキャンプで我々が出かける前に、彼女の仕事で必要なものはないか、と問い合わせたところ、3月中に中央教区の各教会の教会学校教師の研修をして、4月、5月のあちらの夏休み中の、それぞれの教会での夏期聖書学校の準備をしたい。そこで、必要な教材をリストアップしてくれました。そして、出発前の2週間余りの間に、九州のフィリピン協働委員やキャンプ参加者が中心になって中古や新品の教材を揃え、ダンボールに5箱分を持ってゆくことができました。また、一昨年ギターを10本寄付したことがありましたが、今回、2箇所のキャンプ地でまたギターを使いたい、ということになったので、マニラ空港から中央教区の事務所へ向かう間に、2本購入して、各伝道区長に手渡しました。

(多くの交わり)

今回のキャンプには、二つの教区だけでなく、東京聖三一教会のフィリピンプロジェクトも加わりたい、ということでしたので、三者の協働活動になりました。結果的には、東京聖三一教会からは、加藤望さんおひとりになりましたが、彼の豊富な経験が加わって、インファンタのグループでは、彼の指導で感謝の夕食会を私たちが準備することができました。また、マニラに着いた翌日には、宿泊したホレブハウスに関連した聖公会の敷地内にある聖アンデレ神学校で行われた、灰の水曜日の礼拝で、立教女学院のグループ、特に引率した中村邦介司祭、また福岡や熊本に以前住んでおられたフレーリー司祭とも再会できました。また、その礼拝の説教者であり、神学校で5週間特別に聖書の講義をされた、オーストラリア聖公会のアーサー・ジョーンズ主教とも、礼拝後に立ち話をしたり、また、日本の学校の数学教師を退職後、フィリピンで活動しておられる原美根子姉にも、お世話になって、たくさんの交わりを経験できました。フィリピンは、アメリカ聖公会の影響が強いので、エピスコパルチャーチ(監督教会)という言い方が一般的ですが、私たちが普通、世界の聖公会を表現する時は、アングリカン・コミュニオン(「聖公会の交わり」とでも訳したらいいのでしょうか)と言います。アングリカンは、どちらかと言うと、アメリカよりイギリスの影響を受けた言葉ですが、まさに、交わりの広がりを感じることができました。

(レイテ島ではなかった災害)

九州教区の中村正司祭のグループは、南タガログ伝道区のホーリー・イノセンツ(聖なる幼子)教会で働きましたが、私のグループは、マリラケ伝道区のインファン

タという町に行きました。マニラから東に直線距離で、80キロくらいの、ルソン島東海岸の町です。ここは、2004年11月29日、夜中に山の土砂が侵食されて、大量の水と一緒に押し流される、erosion という現象が起こったそうです。それによって、私たちの宿泊した家のあたりも、人間の背の高さくらいまで水が来た、ということ、一緒に私たちを車で送ってくださった、タクロバオ主教(フィリピン中央教区主教)が、その跡を示してくださいました。大勢の人が亡くなり、死体は海から揚がった、ということです。私たちの世話をしてくださった方々も、何人か家族を失った人がいました。今年のレイテ島の現象は、地滑り(landslide)と呼ばれていて、少し現象が違うようですが、山林の伐採などのあと、多量の雨がこれらの現象を起こすようです。私たちは、約4時間かけてインファンタまで行ったのですが、最後の1時間、山を下る途中で、あちこちに、山が侵食され、道路に岩石が転がっているのを見ました。レイテ島のことだけ考えていたのですが、私たちの滞在した町にも似たような、大きな現象があったのです。この出来事が報じられ、大韓聖公会から献金が集まり、現在、信徒の家庭で礼拝などを守っているのですが、教会建設のため、中央教区は、600平方メートルの土地を手に入れたのでした。私たちが草を刈ったり、土を均したりするワークをしたのは、その土地でした。

(ココナッツ椰子の木と漁港の町インファンタ)

町に到着した日、私たちの世話をしてくれているネッド司祭は、海岸にある、ネルソンという人の家に案内してくれました。庭にたくさん、ココナッツ椰子の実をつけた木が生えていて、その実を取って、私たちは一人一人、その実の中にあるおいしいジュースを飲みました。そして、実を切り開くと、ココナッツの白い果肉があって、それもおいしく食べました。海岸に出ると、太平洋が広がり、海岸には、食べ終わった椰子の実の殻がたくさん転がっていました。それで、思い出したのが、島崎藤村の「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実ひとつ」という歌でした。日本の海岸に椰子の実が流れてきたのを見て、藤村は歌ったのでしょ、あの名も知らぬ遠き島とは、もしかしたら、このあたりのことだったのだろうか、などと思いますと、椰子の実を通して、フィリピンと日本がつながっていること、そして私たちのふたつの教区の交わりも、それと似たようなものを感じて、椰子の実は、この重要な掛け橋のように思えました。ワークを終えて、土曜日、少数民族ドゥマガの人たちが住む、ルバヤの村を訪ねました。途中で、様々な色をした魚介

類を買って、訪ねたのですが、私たちが子ども達に凧揚げや折り紙を教えている間に、ルバヤの人びとが、海岸で魚やイカなどを焼き、昼ごはんを作ってくれていました。私はその光景に、懐かしさを覚えました。どこかで見たような姿でした。実際には、私の経験ではなく、ヨハネ福音書21章の、復活したイエス様が、7人の弟子たちに炭火をおこして魚を焼き、食事を用意してくださった、あの出来事を思い出させるものだったのです。フィリピンの浜で、あんなおいしい食事をして、2000年まえの出来事が再現されているような感動を覚えました。

(私の課題)

土曜日の夕食は、加藤さんの提案で、私たちが食材を買い込んで、教会の人びとにお礼の食事を作ることになりました。そして翌日は、9時から聖餐式をしました。これは昨年同様、タガログ語の聖餐式で、礼拝の形式や特殊な用語などで、だいたい礼拝の内容は理解できました。そして、説教も昨年同様、私が英語で話すと、ネッド司祭がタガログ語に訳してくれる、という方法。私は、昨年のキャンプから一年間に学んだことを述べる、という説教の内容になりました。昨年、日本に帰る前の日にマニラで「フィリピンの神話と伝説」という本を手に入れ、それを読んで、日本語に訳し、ホームページに掲載できたのですが、その中で印象に残った、グアバという植物にまつわる話をしました。そして、私たちが聖書で読んだ話と似た話が、まだフィリピンにキリスト教が伝わる前から存在していたことに驚いたことを紹介。フィリピンにはいかに素晴らしい文化があるか、感動を語りました。今回のワークキャンプ中にも、また新しい「フィリピン 神話と伝説」という別の本を手に入れたので、来年までに読んで、また翻訳しようと思っています。素晴らしいものを分かち合うために、貢献できたら、意義深いことでしょう。

(最後に)

タクロバオ主教は、来年も大勢若者を連れてきてくれ、と言われました。また、今年の秋には、すでにロンメル・アデバン司祭が来ることが決まっているようです。一層両教区の交わりが深まり、2008年のランベス会議では、姉妹教区の決議を実行した成果が報告されるよう、期待しています。



## 満面の笑みと

## フィリピンの青い空を感じて

江口聡子



(左端が江口姉。右から2番目は宮崎兄)

わたしのフィリピンへの旅は、熊本聖三一教会で行われたオリエンテーションからすでに始まっていた。その日に山岳地帯のホーリーイノセンスに行きたいと希望を出したのは、泊まる場所が現地の民家にホームステイだと聞かされたからだった。私は英語もタガログ語もまったく話せなかったが、フィリピンのことを直に知るにはホームステイしかない!と思い、何も考えず希望を出した。ほんとにその時は何かが起きる不安とかの前に、たくさんのドキドキとワクワクが頭の中で踊っていたような気がする。

実際、リタでの生活は本当に楽しいものだった。右手でごはんを器用に食べたり、川での洗濯と洗髪と川にバシャーン。リタの人たちの輪に入りたい!たくさんの笑顔が見たい、ただそれだけを考え、あっちでの生活に慣れようと楽しんでた。タガログ語で挨拶を試みたり、こどもたちとふざけ合ったり、何もかもが新鮮で生きてるっていう実感をも味わえたくらい、リタでの生活はかけがえのないものだった。

しかし、その楽しい生活だけがこのワークキャンプではないと考えていた。自分自身、今回のフィリピン行きには色んな思いを持って参加した。それはわたしが活動しているフェアトレードへの疑問や自分自身への問いかけ、そしてずっと自分の中にあつた先進国と発展途上国のいう豊かさの観点の違いだった。「豊かさっていったい何?」その疑問がずっとフェアトレード活動や大学

の勉強を通して、わたしが感じてきたことだった。それは日本でウダウダ考えてるだけじゃ何も変わらない、フィリピンという地に行ってその国の状況を自分の目で見て確かめないといかん!!ありのままのフィリピンを感じたい、そう思って今回のワークキャンプに参加した、しかしフィリピンの現状をあらためて自分の目で見てほんとのことを言うと驚いた。物乞いをする子ども。車がすごいスピードで行き交う道路のそばにうずくまっている男性、そのそばを歩く私立の制服を着た女性たち。歩道にはぐたっとする我が子を抱いたまま手を出さず真っ黒な女性。高速道路沿いにあるトタン屋根だらけで今にも崩れそうなたくさんの家、家、家。ほんとに心が痛かった、感じたくもない貧富の差をそのとき痛いほど感じた。その時、こういう場で「私ができることは何だろう」と改めて感じた。リタの子どもたち、フィリピンのけて裕福ではない子どもたちがこれから生きていくために何か私にできることはないか、そう初めて実感した。今回初めてフィリピンに行くことができて、ほんとうにほんとうに良かったあ、自分は幸せだとほんとに感じた。このワークキャンプに参加する前に抱いた思いのほかに、たくさんの宿題を持って帰ることが出来た。

最後にフィリピンワークキャンプに参加して、現地での楽しい生活、リタの人たちと共に働き汗を流せた時間、楽しいタガログ語講座、 になっての歌を歌う喜び、子どもたちの笑顔とキラキラした瞳、現地の大人たちを巻き込んでのダンス、本当にあの1週間は私にとって最高の楽園であり、フィリピンのそのものを感じられた1週間だった。これも私一人では感じ得られなかったことだと思います。フィリピン中央教区のみなさんをはじめ、福岡教区事務所の方々、小林先生に中村先生、今回いっしょに参加した沖本さん・瑠美ちゃん・省ちゃん・こうちゃん・岡積さん、フィリピンワークキャンプに携わったたくさんの人に感謝です。このワークキャンプは帰ってきて終わりじゃなくて、本当にスタートだと思います。また必ずリタに戻ろう、そう思える旅になりました。本当にありがとうございました。



## キャンプ日誌

鹿児島復活教会

アンデレ岡積鉄男



(左が岡積兄。作業中、雨のため休んでいるところ)

3月1日水曜日

フィリピンのインファンタにおいて、長老ダマソ・テナという方に会った。僕の価値観は大きく変わった。自分の娘である8女の彼女は大学を出ても、職がないという。その話を聞いて、とても胸が痛くなった。僕のこれまでの価値観は、日本にいたからこそその甘えで満たされていた。そんな中、山から児童を学校に行かせて希望が、この町に与えられたという長老の話聞いて、僕は大きなカルチャーショックを受けた。彼いわく、インファンタでのワークキャンプの手伝いをしてくれるとのこと。僕は、タガログ語で「ありがとうございます」という意味の「マラミン・サラマップ」という言葉を言うと彼は黙ってニッコリ笑い、僕の心をいやしてくれた。その笑顔に僕の心は洗われた思いがした。いやむしろ、その笑顔を待ち望んでいたのかもしれない。その笑顔によって僕はここのフィリピンにおける生活様式全て、そして、そのフィリピンで力強く生き抜く姿に感動した。その村では、地すべりによって村がかなり埋まり、多くの死者が出たという。それでも再建の道をひた走り、なおエビスコパルの洗礼を受け、ネッド司祭の努力もあり、この村はキリストによって、そしてむしろ聖霊の働きによって勇気を持って歩もうとしている。それは日本では味わえない貴重な経験であり、その経験によってフィリピンのこのインファンタでもきっと神のご加護がこれからあることをひたすら願って、今日の報告を終わりたい。明日の土埋めの作業も、この長老の息子たちと共に、そして何よりキリストと共にすばらしい啓示が表れることを期待する。これは、僕の経済学のプライドを捨てた

文章であり、心からの本音である。そして何より、このキャンプが空港で主教が話したとおりになるように、そしてまた、小林司祭や僕の所属の中野司祭の熱い気持ちに心えるようなものであることを腹の底から思う。僕の信仰の中に新たな命を与えてくださった主イエス・キリストの恵みと平和がこれからも、この町に、そして全世界にあるように祈るばかりである。しかし、それにもまして地すべりやクーデターが起こりそうであることも神のみ心であるという神のみ心の現実をしっかり受け止め、これからの短い生活を実りある正しいものにしていくことこそ重要であるという考えを基に、これからのワークをしっかり、行うつもりである。

3月2日木曜日

ここインファンタでの海水浴を楽しむだけ楽しんでこの文章を書いている。フィリピンの方々、特にネッド司祭においては自分のことはかえりみず、一所懸命伝道にはげんでいる姿に感動した。そしてネッド司祭いわく地すべりについても、木の伐採が原因だとわかったが、それを止めることはできないらしい。なぜなら、おそらく彼らは、そうせずには生きていけないからである。とかく、人間はいい方に目がいきがちである。しかし、インファンタでは、キリストのみ心として、弱者、貧者に目を向けて、自然の厳しさ、偉大さを理解しながら、共存していくことこそ重要なのである。実際ネッド司祭の伝道がそういう部分があることは否めない事実だ。その中で九州教区として遊びに来たのではなく、ワークキャンプに来たので、九州教区主教をはじめ、たくさんの方々のいろいろな思いを無駄にしないようにしていきたい。今日のワークは、まず第1日目のハードワークであった。草刈りを現地の方々と一緒にあって、暑い午前中の作業をし、皆さんヘトヘトになった。この気持ちは僕も何年ぶりかに味わい、新しい経験をするだけではない、日本でもしている草刈りによって、また新たな一面を見ることができて、良かった。その後は、昼寝をし、昼食をとってから、水泳をし、観光などもして、夕食後ネッド司祭をかこんで楽しく酒が飲めたことが本当に良かった。おそらく僕ら日本人は、何か当たり前のことを見過ごして、ここに来ている。なぜなら、偏見や差別によって、キリストの道に反するような行いをしようとしているからである。しかし、ここには希望にあふれた、たくさんの若者たちがいる。その人たちの目はとても輝いている。多くの人が地すべりの困難の中でも、パワフルに生きている。その生き生きとした目を見て、僕目の目も輝いていたかと再確認させられた。そして、何

よりフィリピン人はとにかく陽気だ。少々のことでもびくともしない。そのぐらいの強さを日本人も、持たなければならぬ。異文化を体験し、実際その生活をおくり、その土地の食事をとる。旅においては、ごくごく当然なことではあるが、それを楽しみながら、明日の土の埋め立て作業をがんばりたい。キリストの平和が、インファンタに、長老の村に、そして皆さんにあることを心から祈りつつ、今日の文章を終る。

3月3日金曜日

土の埋め立て、今日はこのことにつける。午前中から雨。そして、ブルドーザーで運んで来た土をならす作業を急にフィリピン中央教区はシンボリックに決定した。シンボルとはボランティアのことである。僕らは、雨の中、このシンボルに出会った。それによって雨の中作業した僕らの頭の中は、ハードワークの疲れに満たされていたのが、一変した。どう一変したかということ、ボランティアの大切さ、そして、何も問題のないような顔をして、フィリピンのネッド司祭は僕らを先導していたこと。それは僕のこれからの信仰の上ですばらしい体験であり、いかにボランティアはあるべきかを問うものである。簡単に言うと、偽善ではなく慈善をということである。今まで大それた思いにかられ、周りが見えなくなっていた僕の想像の範囲内の、勝手な考えが全部とり去られた。それによって、どうとり去れたかをキリストと共に述べたい。2日間のハードワーク、ネッド司祭はこう言った。「仕事をするのではなく、楽しみなさい。」と。それは僕にとっては光が見える一言で、ワークキャンプだから、がんばらなくてはならないと思っていたわだかまりを解いてくれた。そしてネッド司祭は僕の相談にもものってくれ、「ただ祈れ」と言ってくれた。それが僕のどれだけの安心になったか、初めてのフィリピンで、そんなに優しい言葉をかけてくれる、しかも司祭に出会えた奇跡を聖霊といわず、何と言おう。これからの九州教区での、鹿児島復活教会での営みに勇気を与えてくれた。これこそ協働ではなからうか。互いに助け合い、友情を深め、神に助けを願いながら一つになって同じ仕事をする。小林司祭も、僕のような人間に厳しい忠告をしっかりと口調で言ってくれる。これを神のみ恵みと言わず何と言おう。おそらく、このインファンタで、とても大きなものを得たと確信する。大きなものとは、大人になること、人の意見に割り込まないこと、正当化し過ぎないこと、経済学だけの考えで、全てを考えないこと、仕事は楽しむこと、同士に対しては偉そうな態度をとらないこと、そして、何より、信仰に基づいた

キリストを土台とした交わりを大切にすることである。それは全ての人に言えることではなからうかと思う今日このごろである。

3月4日土曜日

インファンタ。僕にとってはとてもかけがえのないものになった。インファンタでの最後の一日。僕は神に、子に、聖霊に感謝せずにはいられない。インファンタでいっしょにボランティアをしてくれた女性が「今日ここでは最後だ。僕をどう思うか」と聞いたら、こう答えがあった。「あなたは幸せだ」。この一言に心から救われた。この友情を心から感謝する。そして、地すべりのあった山での風揚げ、これも最高だった。子供たちのはしゃいでいる姿を見て、心の底からいやされた。これを神のご加護と言わず、何と言おう。インファンタで出会った人々全てに感謝し、祝福を祈りたい。今日までインファンタでの協働によって全てのことが神のみ恵みだということがよくわかった。最初はインファンタに来た価値や意義が見いだせず、四苦八苦ししていたが、ここに来て、ようやく理解できた。僕の悪いところ、そして、善いところを、聖霊の助けをかりながらわからせ、そして、改善させようと神はされておられる。人間は、とかく人の悪いところしか見えない。だが、人の話によく耳を傾け、人間関係を大事にし、どんな人にも親切に接することができれば、必ず心が開けるとわかった。インファンタと長老の村には経済的な差もあり、お互いがなかなか理解できないという。むしろ長老の村は貧しいからこそ、子供に学校にも連れて行けない。しかし、そのようなところにこそ、キリストの平和があるべきで、その差別や偏見を捨てて、伝道することがとても重要である。インファンタでは、そのようなことが気付けてとても幸せであった。この経験を次の礼拝、そして鹿児島に帰ってからの僕の教会生活に生かしていきたい。フィリピン中央教区との九州教区の協働には多くの部分で気づきが与えられた。それは、仕事をするのではなく、楽しむこと。そして何より皆さんで一つになって全てのことに取りくんでいくことである。この旅での経験は、人間関係の難しさ、敬語の大切さ、トイレに行くタイミング、良いコミュニケーションは言語を越えてなされるということである。この経験によって必ず鹿児島復活教会での僕の志気は、より高まると確信してやまない。「少年よ大志をいだけ」



## フィリピンへ行ってきました。

久留米聖公会 沖本恭子



(ジブニーの運転台の横に乗っているところ)  
ビーチと隣り合わせの場所で、水着を着て、現地のたくましいお兄ちゃんたちと働き、夜は杯を交わし、あっという間に時間は過ぎ、涙々の別れになるんだろうな...。このような思いを馳せながらマニラへ向いました。

一歩外に出ると、アノ独特な「もうわっっ」とする熱気に迎えられます。それまで頭の片隅にあった風景や、顔がフラッシュバックし、一気に懐かしさがこみ上げてきます。気持ちのいい瞬間でした。この瞬間は一度行った者にしかわからない、なんとも言えない瞬間です。ここからフィリピンモード全開です。

6 時間かけて移動した Infanta は海沿いの人口 20,000 人程の小さな街。ジブニーやトライシクルだらけで歩くのも一苦労。毎日雨が降っており、ガイドブックから年中雨季であることが判明。そのため作業も思うようには行かなかったのも納得。

「ここに教会を建てる」と案内された場所はどう見ても雑木林でした。ネッド司祭曰く「この道からあっちの道まで」。しかしあっちの道は見えない。行きに思い浮かべていた夢は幻想と化し、背の高さもある草やバナナの木とひたすら格闘の初日。次の日は土砂というより土混じりの岩、大型トラック 20 台分を均す作業。雨のため中断したが、半分はジャングルのまま、地均しも 3 日程しかできず、今年のワークはおしまい。移民を研究している私にとってはとてもいい体験になりました。

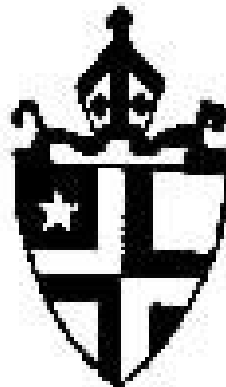
私はどの国に行っても、「こんにちは」もしくは「安

いよ」と声をかけられます。「アンニョンハセヨ」「ニーハオ」ではなく「こんにちは」なのです。彼らは、日本の場所や、日本がどんな国か知らないのに、私が日本人であることの判別はつくりし。不思議である。ここ Infanta にもマーケットがありました。やはり「こんにちは」でした。マーケットには主に、日本食の食材を求めて来ていました。(土曜の夜に、日本食を振舞うことにしていたため。)このマーケットに来れば、豚の角煮、炒飯、麻婆豆腐、白菜の漬物を食することが可能なのです(みりん、酒はワインで代用)。フィリピンにいながらして、日本食に困らない...当然です。昔の日本もすべて素材から作っていました。私たちはプラスチックの容器に入ったものを利用して、そう思うだけである。ここに来て自分の原点を見つめなおすきっかけになりました。

フィリピン然り、アジアの国々には子どもとやせた犬(のら)が多い。彼らはたくましく、エネルギーがみなぎっている。子どもはそこら辺のモノで遊び、大人に交じって、はだして働く。そうやって育った、同世代のお兄ちゃんの真っ黒に焼けた肌に輝く白い歯、そして太い腕にうっとりしてしまう。予備軍もたくさんおり、「フィリピンに残りたい」と思いました。

今はまだジャングルでもきつと数年後には立派な教会が建立されていることを考えると、ロマンをかきたてられます。続きは次回参加するメンバーにバトンタッチします。そしてまたバトンを渡していただきます。このようにして九州教区とフィリピン中央教区との < Bridge > をもっと強固なものにしてほしいと思います。

第 1 回目についてフィリピンへ行く機会が与えられたことを心から感謝します。そして今回のメンバーに巡り会えたこと、ワークキャンプを無事に終えることができたことを神様に感謝いたします。



## フィリピン ワークキャンプレポート

東京聖三一教会 加藤望



(レストランで、江口姉と)

イザベラ州インファンタという土地についてこんな話を断片的に耳にした。ローマカトリックが16世紀に布教した際、クリスマス物語がなかなか受け入れられなかった土地、昨年10月末の大雨による山からの土石流と大洪水で多くの家族を失い被災者を出した土地、漁港に水揚げされるカツオ等の種々の魚、山林の伐採禁止令が出ていても切り出される木材、マーガリン、石鹼、ろうそく等の油脂原料になり、ナッツやココナツミルクやココナツワイン、ココナツヴァージンオイルを生み出すヤシの木(ココナツ)、この三つの主な産業が庶民の生活を支えている土地。

タクロバ主教が運転する車とネッド司祭が運転するライトバンが九州教区の若者4名と小林司祭と私と荷物を分乗させて、次々とジブニーとトライシクルを追い抜いてゆき、マニラから約4時間かけて到着した所がワークキャンプの地、インファンタであった。

この土地の子供たちや女性は天然の素朴な笑みを浮かべる。4カ月前に被災し貧しさを強いられている人々の姿に。「今を生きるしなやかさと明るさ」を感じた。この土地における教育という意味は知識を得ることだけではなく、難しい状況をより良くさらに幸福に変える力を身につけることなのだと言感させられた。

ワークキャンプ地はホームステイの宿泊所と3食をまかなってくれる信徒(ジェンマさん)の家の双方から2キロほどの沿道にある約600平米の土地であった。大韓聖公会テジョン教区(ロー司祭担当)が50万ペソ(1円=0.415ペソ換算で約120万円)出してチャペル建設予定地として寄付したという。ネッド司祭は土地

の担当司祭として中央教区から派遣され8年間、生き抜こうとしている人々の世話をしながら布教に携わってきた。

ミレニアムの2000年、この土地の原住民の村ドマゴの長老ダマソ氏に洗礼を授けて以来、多くの子供たちが幼児洗礼を受けるようになり、雑貨店を営む信徒のジェンマさんは自宅を日曜日の礼拝と集会所に開放してくれるようになった。

ワークキャンプ初日はその長老のダマソさんとジェンマさんの家族、親族の有志総出でチャペルの完成を夢見て、建設予定地に生い茂る草を刈り取り、バナナの木を切り倒し、空き地にする作業に我々と一緒に汗を流した。

二日目と三日目は時折スコールの降る中、ジャリを満載したトラックが20台ピストン輸送してくる度に、我々はスコップを手にブルドーザーの力を借りながら、山盛りのジャリをすくって平地にする作業をした。全敷地の10%ほどしか平地にできなかった。しかし、働くみんなの姿の中に、16世紀の長崎、明治時代の大阪の川口、築地の居留地での教会の礼拝堂建設に尽力した数多くの歴史には名もない労働奉仕者や職人たち、そして外国の宣教師たちの働きが重なり合い、日本の教会は欧米の多くの人々の献金によって誕生してきたことが脳裡に去来した。

4日目はジブニーに相乗りして山の裾野が海岸にひろがるドマゴの村へ行った。九州教区のみみんなは村の子供たちに凧作りを指導した。できたての凧が海風にのってすがすがしい空に舞い上がる。ドマゴの村の子供たちと九州の若者の目線は同じ凧と同じ風と空を追いかけていた。年がいくもなく心がジーンと熱くなった。

お昼は浜辺での焚き火の中で獲れたての魚を焼き、飯を炊いてヤシの葉にのせて、みんなで車座になり、手をつき合って食べた。ちょっとひょうきんで気さくで愉快でおしゃれな恭子さん、気持ちのやさしい控えめな感受性と秘めた夢のある瑠美さん、繊細で幾何学的な精神を宿している省太郎君、自負心が強く挑戦的だが正直でナイーブなアイアンマンこと鉄男君、そして洒落とつぶやきとぼやきを絶妙にまじえながらも人や物事に開放的で肯定的で寛容な人柄の小林司祭、私は日ごろの不摂生がたたり、息切れ切れのワークであったが、みんな良い仲間恵まれなんとか乗り切った。みんながそれぞれ「らしさ」を出し合って、ワークは我々に大きな思い出と礼拝堂の夢を残して無事に終わった。

その日の午後、私どものキャンプを支えてくれたホス



ピタリティ旺盛な世話役の人たちへのお礼と感謝をこめて、市場へ買出しに行き、ジェンマさんの家で手料理を作り、みなさんにふるまうことにした。メニューは豚の角煮(みりんと酒がないのでココナツワインと白ワインで代用)、焼き飯、塩もみ白菜とマンゴのサラダ、マーボー豆腐、トマトとココナツヴァージンオイルと唐辛子の Pasta。小生が板長で板よこ、板むこう、切り方、煮方、いため方を九州の仲間がそれぞれ分担し、客人 40 名以上のにぎやかで楽しい大夕食会となった。

翌日の日曜日の朝、同宅に昨夜の面々が揃い、ネッド司祭の司式でタガログ語の聖歌と祈り、小林司祭の英語の説教でおりなされた主日礼拝にあずかった。この日に至るまでの道のりには架け橋の媒体としてかかわってきた多くの人々の働き、献金と願いと祈りがあることをあらためて思い起こさせる礼拝であった。礼拝後マニラへの帰路車中でゆられながら新しいチャペルで礼拝をささげる地元の人々の姿が車窓にとびこむ風景に映っては消えた。

追記

インファンタのココナツヴァージンオイル(380ml 114ペソ 30円フェアトレード価格 50円位)をまとめて購入し、聖三一教会のバザーで売った収益がチャペル建設の支援金と聖三一教会のバザー収益金となる方策を調査中であります。また、この度のチャペル建設のための地ならし工事費、資材費、労賃等のために聖三一教会の国際交流基金から7万円、九州教区から10万円を献金いたしました。タクロバ主教、ネッド司祭から感謝の言葉をいただきましたことをご報告いたします。

## キャンプスナップ



\* インファンタへ到着した日、ネッド司祭は、われわれを海岸近くのネルソンさんの家に案内し、生えていたココナツの実を切って、中にあるジュース、そして白い果肉をたべさせてくれた。



4日土曜日には、ドゥマガの人たちが住むルバヤという村で、子供たちと凧揚げをしたが、ココナツ椰子の木が印象深い。

## フィリピンワークキャンプに参加して

坂本瑠美

今年で三回目となるフィリピンワークキャンプに、今回始めて参加しました。帰国して改めて思い起こしてみると、本当に貴重な体験ができたこと、大きな怪我や病気もなく全員が無事に帰国できたことに感謝の気持ちでいっぱいです。フィリピンは、開放的で



明るくて陽気な国だというのが第一印象で、すぐに好きになりました。一週間の間にいくつもの忘れられない体験をしましたが、特に印象深かった出来事を二つあげたいと思います。

ひとつは、インファンタでの三日目の昼ご飯を、手を使って食べた事です。ご飯も魚も川沿いで調理したものを、バナナの葉ののせてみんなで囲んで食べました。フォークがないなら手を使う、お皿がないなら葉を使う、というとてもシンプルな発想が新鮮に感じられました。

二つ目は、子ども達との交流です。インファンタでお世話になった家には、10歳前後の子ども達が数人いました。作業の後、夕ご飯を食べて家に帰るといつも笑顔で迎えてくれました。そして、折り紙・歌・踊り・ゲーム・おしゃべりなどをして夜を過ごしました。子ども達の目はきらきらと輝いていて、屈託ない笑顔にたくさんの幸せを分けてもらったような気がします。その中で、最も心に残っているのは子ども達の母親が「あなたはもう私たちの友だちよ。」と言って抱きしめてくれたことです。会って間もないのにすぐに受け入れてくれたことを本当にうれしく思いました。そして、受け入れるということは人をこんなにも温かな気持ちにさせるのだと分かりました。

インファンタでの作業は、雨のために思ったよりもたくさんは働けませんでした。しかし、少ない時間の中で気づいた事があります。それはフィリピンの人々の働き方についてです。日本と違って、あくせく働くのではなく休憩しながら、楽しみながら無理せず働いていました。

それは気候のせいもあると思いますが、日本でも学ぶべき所だと思います。

近い将来、この場所に教会が建ち多くの人が集う場所になることを考えたら、神様を想う気持ちに国境も国籍も何も関係ないことを実感しました。今まで日本・九州・熊本と狭い範囲で考えていたことも世界にまで視野を広げることができました。

今回、ワークキャンプを通して学んだこと・感銘を受けたことなどは一生忘れられない思い出となるでしょう。そして、これからの教会生活に生かしていかなければならないと思います。考えるだけではなく実際に行動してみないと分からないこともあると、ワークキャンプに参加して実感しました。今までは考えるだけだったこともこれからは積極的に行動できそうな気がしています。

このようなすばらしい体験ができ、ワークキャンプに参加して良かったと心から思います。



(ルバヤの海岸で昼食・インファンタ)



## フィリピンワーク

松山省太郎



(ホームステイ先の子どもたちと共に)

2月27日福岡教会に泊まり、2月28日から3月7日までの約一週間、安全にフィリピンに滞在し無事に帰ってくることができてよかったです。フィリピンに行く少し前から現地では大統領がどうのこうの・・・という治安があまりよくないと聞いていたのがウソのように何もなくてよかったです。感謝。感謝。

フィリピンという日本とは違うところに行っているなことを学び体験することができた。一日目と最終日はマニラで過ごしそれ以外はインファンタで過ごした。マニラはフィリピンの西側に位置して行ったときは乾期だったらしくそれほど暑いという印象もなく過ごしやすいかった。中央教区には自然を駆けたり自転車で走り回る子供たち、バスケットを楽しむ青年たちやテニスを楽しむ大人たちがいた。ものすごくのどかだった。子供たちはとても人懐っこくて、一生懸命英語で話しかけてくれたので日本人の僕たちも一生懸命英語で受け答えしたが、やはり少し英語にはフィリピンなまりがあるらしく少し手間取った。宿泊したところの事務員みたいな人たちもいい人たちばかりでいつもニコニコしていて、道で拾ってきたマンゴーを皮をむいて切ってくれた。うまかったぁ～！インファンタはフィリピンの東側で一年を通じて雨が多く、行った時も夜はほぼスコールだった。だからホームステイした家の前の泥の水溜りはなくなかったのでグチャグチャでサンダルではちょっと辛かった。インファンタは海沿いの町でマーケットは

人々であふれていた。そこの人達の団結というか、人のつながりはすごかった。ある村に行ったときそこには長老がいて遠い山からでもその長老を訪ねて人々が集まってくるらしい。そこに集まった人たちは何をしてもなく会話を楽しんでいるようだった。タコ作りをしにいったむらでは初めは10人もいなかったけれどここで聞いたのかどどん人が増えていった。そして子供達はとても楽しそうだった。日本の町でタコを作ると言っただけで呼びかけたら何人の子供が集まるだろうか。みんなエアコンの効いた部屋の中でゲームをして家から出たくない気がする。あの地域は決して裕福ではないと思うけれど、あのままでいてほしいとおもう。インファンタに行って少ししてから気づいたけれどほとんど時間の感覚がなく時計はぜんぜん見なかった。家に貼ってあった予定表にも時間は書いてなく lunch work swimming みたいにやることだけ書いてあった。のんびりで日本みたいに時間に縛られずに生活していてすごく過ごしやすかった。

ずっとこの関係が九州とフィリピンとで続いて、このプログラムが毎年毎年あるならば毎回でも行きたいと思いました。いつかは今回出会った人達と再会したいです。



(日曜日の礼拝後、インファンタの人びとと)



## フィリピンワークキャンプ

宮崎光平



今回、フィリピンワークキャンプに参加できたことは、自分自身にとって大きな経験となりました。

僕は、ホーリーイノセント(リタ)という場所へ行きました。マニラから車で1時間半くらいの場所で山の上の方だったので気候的にはマニラに比べたらとても涼しい所でした。リタの人達は温かく迎えてくれました。

二日目から作業を開始。教会の周りに花壇作りのためにひたすら穴掘りをしました。教会の入り口前に階段を作るみたいだったのでそこにも穴を掘りました。

三日目からはセメントで固めたり。作業で気づいた事は現地の人達の体力は凄いいということ。山の上とはいえ、昼間は暑いのに自分の二倍も三倍も働いていた。自分の力の無さを実感しました。

作業の他に子供たちに凧揚げと、折り紙を作って遊んだりした。最初、子供たちに警戒されてたけど一緒に遊ぶようになってから心開いてくれて嬉しかった。

ほんとに笑顔が可愛くて天使のようでした。

最後の夜にも子供達とたくさん遊んだ。

ここの生活にも慣れてきた時に別れは辛かった。リタの人達とも仲良くなれたのに。もっと長く居たいって思ったし、ほんとに短く感じた。

でもここでたくさんの人達と出会えた事、たくさんの笑顔で満ち溢れているこの場所にいられたこと。この場所にいつかまた行きたいです。

ありがとうリタのみんな。

フィリピンで感じた事は、貧富の差が激しかった。路上では普通にお金を恵んでくれというような人達がたくさんいたし、コンビニの前にもたくさん。そういう人達を見て自分はほんとにいい生活をしているんだと改

めて実感させられた。

あと、やはり言葉の壁にも直面した。英語は必要だなんて感じたし、自分の英語能力の無さにも気づいた。伝えたいのに伝えられないもどかしさ。悔しかったです。でも喋れなくても通じるものもあるんだと感じたし、分かる時はわかるんですよ。なんか不思議。

このワークキャンプで得たものはとても大きいものでした。出会った人達、ならびに関係者の方々に感謝します。

## 九州教区

### フィリピンワーク・キャンプ感想文

中村正司祭

聖なる幼子教会(Holy Innocents Church)組の旅行・ワーク日程と感想。

中村正司祭、江口聡子さん、宮崎光平さんの分、全体行動と分かれた部分だけを記します。

3月1日(水)

9:30 ホリオさんの運転の4輪駆動車で首都圏ケソン・ホレブ・ハウスを出発。マニラを抜けるのにかなり渋滞。空港の横を通り高速道路で南下。一見ホリオさんは強面(こわもて)の顔をされており、言葉も通じにくいのでかなり緊張した。ホリオさんもわたしたちに気を遣ってくださった。

11:30 タガイタイ市のレオン・パブロ司祭牧師館に到着、ローリー夫人が昼食をごちそうして下さる。この食事がフィリピンでの最初の家庭料理。食べきれないほどのごちそう。食後に冷やしたマンゴーとココナッツパイをいただく、これも絶品。レオン司祭のわたしたちに対するVIP待遇に感謝。

13:00 しばらく牧師館で歓談、日程の打ち合わせなどを行い再びホリオさんの運転で、レオン司祭夫妻も同行して出発。タガイタイ市はタール火山がある湖から標高差500mくらいあり、風光明媚で首都圏の避暑地になっているとのこと。そのようなすばらしい眺めを見ながらイソセント教会に向かう。

14:40 マガラネス・カビタの聖イノセント教会に到着。教会で歓迎の礼拝とワークキャンプのオリエンテーション。教会はマンゴーの木の下で礼拝することから始まり、現教会堂の裏にはニッパ・ヤシの茅葺き教会の跡があった。現礼拝堂は2年前に建てられ、九州教区の2年前のワーク(牛島司祭がこの教会を訪れた)では礼拝堂の床の部分セメントで張る作業をした。歓迎会で

は数名の夫人たちと青年女性、子どもたちが歓待してくださった。ここで初めて木になっている実をとって、ナタで割りココナッツジュースをいただいた。一回で飲みきれないほどに量が多く、しかし自然の恵みの味がした。レオン司祭はその実を半分に割り、丸いからについているココナッツの白い実の部分を食べさせてくれた。おなか一杯なので一口だけ味わったが、ココナッツの香ばしい味がした。その後、手作りカイトの制作など聡子さんと光平さんは子どもたちに指導した。

16:00 ホリオさんもマニラに帰り、レオン司祭夫妻はタガイタイに帰宅。わたしたちのホストはハニーリン・ビダロという20歳の女性。光平さんと同じ年のしっかりした女性だ。わたしたちは予定表とは違い、男性2人もホームステイストとのことでハニーリンにつれられて、彼女の自宅で生活することとなった。わたしと光平さんは庭に面した6畳ぐらいの部屋、聡子さんは隣の6畳の部屋に泊まることとなった。ご家族を紹介してください、それぞれ部屋に入り、荷をほどいていると「散歩に行かないか？」とハニーリンが誘うので出かけることとなった。彼女と姪のプリンセスと少年とわたしたち3人の6人で出発。山道を通って身体を洗ったり、服を洗濯したり、遊んだりする小川に到着。鳥たちがさえずり、木に果物が実り、牛が草を食べている風景は楽園そのもの。わたしは十分歩いたので、ここで終了したがハニーリンはさらに進んで、良いところに行こうと言い、無理矢理つれられていった。山を登り、隣の親戚がいる村へ行き、お菓子を食べて休憩。そしてニッパハウスの親戚を訪れることとなり、またかなり歩いて出かけた。20分ほどで小さな家に到着。男性たちと女性たち7、8名が酒盛りをしており、子どもたちも夕方の時間を過ごしていた。家は竹と茅で出来ており、窓もなく風通しがいい。こんな小さな家にこれだけの人たちがどうやって寝泊まりしているか不思議に思った。この家でしばらく歓談。夕闇が迫ってきたので出発。かなり歩いて帰宅。帰宅したときはあたりは暗くなっていた。

19:10 夕食。3人のキャンパーのために台所に食事が用意された。かなりのごちそう。食事はわたしたちが食べた後、家の人たちが食べる形となった。そのような食事の仕方に少し驚いた。聡子さんは手で食べることを訓練し始め、見事にそれをマスターした。食後、家の玄関のテラスのような所で夕涼み。テレビなどがなくて、近くの大人の子どもも皆集まってきて"だべって"いる。わたしはビールが飲みたくなったのでレッド・ホースの大瓶と氷を買ってきてもらい、ハニーリンのお父

さんと飲んだ。

21:00 就寝。光平さんと聡子さんはにぎやかに、談笑。

3月2日(木)

6:30 起床。ご近所がすべて鶏を飼っており後ろの家は闘鶏を育てているような家で毎朝近くの2、30羽の雄鳥の雄叫びがこだましていた。そのような中を起床。ここでは水が貴重品で、上水道がないのでトイレと洗顔には少しとまどった。聖書などを読みテラスでゆっくりしているとハニーリンがコーヒーを運んできた。しばらくするとチマキのようなバナナの皮で包んだココナッツの蒸し菓子を売りに来たのでハニーリンはそれを買って、食べさせてくれた。それが朝食だろうと思って食べていると、本当の朝食が出た。今度は机を居間に移してくれて3人で食事。飼い犬も食卓の近くにいておこぼれを待っていた。食後、ハニーリンのお父さんと水くみ同行。500m離れたサリサリ・ストアの所の井戸(電動ポンプ付き)で水を大型ポリタンク8個分くみ手押し車で運んだ。

8:30 教会に移動していよいよワーク。レオン司祭夫妻、専門家男性5、6名、その他教会の女性や近所の男性、総勢20名ぐらいで作業。教会の両サイドと正面の教会建物にひっつけて土台の溝を掘った上にブロック3段を重ね花壇を造る。サイドは10m幅1メートル位、正面は7m位を両サイドに、そして正面を平面にするためにブロック3段四方形で造る。さらにその前面に道路までの階段を造る計画。それらの作業を穴掘りから始め、砂運び、セメント湖ね、鉄筋の切断、など順次行いながら作業。

10:30 ごろ教会のとなりの家の"ピロピロ・パーティ"に招かれた。日本のぜんざいのような味。甘くてココナッツミルクと紫イモがベースになっており、色々なフルーツが煮込まれている。午後の休憩の時には"ハロハロ・アイス"が出てきた。これは鹿児島島の"シロクマ"に似ておりココナッツミルクがベースに色々な果物等が入り、混ぜて食べるとおいしい。12:30まで仕事をして、教会で昼食。皆でおいしくいただいた。午後は14:00から15:40までワーク。

15:30 水浴のため、昨日行った川へ。久しぶりにシャワーして気持ちがいい。その後帰宅、夕食、テラスでのご近所との歓談。中村司祭はレッド・ホースビールの後、就寝。光平と聡子は遅くまでご近所青少年と歓談、ソング大会。

3月3日(金)

7:30 中村司祭は5:00起床。3人とも、チマキ、コーヒーの後、朝食。

8:30 昨日のメンバーと、タクロバオ主教、ダグソン執事も来られてワーク。この日、かなりの部分完成し、階段も上から3段目くらいまで完成。残りの部分は専門家チームが続いて行うこととのこと。

16:00 フローシップ。ワーク終了にあたり、ワーカー交流会が行われ、日本から用意された歌やお返しにフィリピンの教会の聖歌（ギター伴奏はタクロバオ主教）などがあり、タクロバオ主教が"友情と交わりのすばらしさ"についてメッセージされ、レオン司祭の祈祷と主教の祝祷で礼拝が終わった。

18:00 ビール大会。セント・ミゲルを飲み、男性ワーカーが乾杯、主教も交えて夕食前楽しい交わり。夕食は近所の人たちも礼拝堂内に集まり楽しくいただく。夕食後は聡子さん、光平くんのリードで近所の子たちとゲーム大会。大歓声のうちに大いに盛り上がっていた。

20:30 帰宅してテラスで歓談。中村司祭就寝後、青年は大いに盛り上がる。

3月4日(土)

8:00 ハニーリン宅で最後の朝食。いずれの食事もVIP待遇のごちそう。もてなしに感謝。礼拝時間までしばらくあるので、近所のマーケットに連れて行ってもらう。おみやげや、日常品の爪切りなどを買う。土曜日で学校の休日ということも関係しているのかマーケットは人であふれ活気があった。帰りはあこがれのトライシクルに一行9人が乗り教会まで送ってもらった。

11:00 聖なる幼な子(Holy Innocents)教会創立1周年記念礼拝。11時に予定していたが、人が集まらず礼拝開始が遅れた。この礼拝は聖餐式で中村司祭も共同司式と分餐をした。礼拝の中で2名の幼子を抱いた婦人の産後感謝式が行われた。説教の中でレオン司祭は友情と交わりすばらしさを語られ、九州との関係の大切さを説かれた。礼拝後、教会で送別の食事会があり最後の食事をした。三日間であったが、"濃い交わり"の時間を過ごし、2人の青年たちは涙ながらの別れをして教会を後にした。

12:00 レオン司祭の運転でタガイタイを經由し、途中ローリー夫人と分かれて、主キリスト(Christ The Lord)教会を訪問。教会に到着。ここの教会の礼拝堂には椅子がなく、九州教区の献金(援助金)で購入してもらうとのこと。教会の近くの信徒宅に行き、昼食前に海辺まで散歩。子どもたちと夫人たちが同行し、子どもたちは大はしゃぎで水浴びをしていた。その後、さきの信

徒宅で昼食。イノセント教会で食べたばかりだったが海辺の教会だったので魚料理をおいしくいただいた。冷やしたマンゴーも絶品だった。

14:00 教会の人と別れを告げ、レオン司祭の案内でバタンガスの町にあるフィリピンでもっとも古い歴史を持つカトリック教会を訪れた。礼拝堂では結婚式が行われていた。そのあと、中村司祭の願いで教会の近くの間屋街に行き"バロン・タガログ"(フィリピンの男性礼装)をおみやげとして購入した。教会の周りも古いスペイン風の家が軒を連ねていた。

16:00 タガイタイの牧師館に帰宅。シャワーを浴び一息ついた。

18:00 夕食はフィリピン料理のレストランで食事。レオン司祭がごちそうしてくださった。生演奏付きで、席のそばに来て日本のはやり歌を日本語で歌ってサービスしてくれた(レオン司祭がチップを払った)。聡子さん、光平さんは大感激。

3月5日(日)

8:30 朝食後、レオン司祭が管理しているポリスアカデミーの聖公会青年学生の礼拝。

会衆は50名、一教室に満員、レオン司祭は英語で聖餐式。中村司祭は共同司式と分餐と英語で説教。光平さんと同じ年のりりしい幹部候補生の学生たちはほとんどが生き生きして礼拝に参加していた。

10:30 タガイタイのバルナバ教会で主日聖餐式。小さなチャペルでタガログ語の礼拝、中村司祭は日本語で二人の青年に向けて説教、レオン司祭は中村司祭の英語のペーパーに基づいてタガログ語で翻訳。礼拝後はお茶の交わり。

12:00 マニラからの出迎えのホリオさんと合流して食べ放題レストランで昼食。ごちそうをいただいた。その後、牧師館に帰り休息、その後ホリオさんの運転でホレブ・ハウスへ。

#### フィリピン・ワークキャンプ感想文

今回のキャンプはわたくしにとって3回目のフィリピン行きでした。わたくしのこのキャンプでのねらいは"フィリピン・ホスピタリティー"について考えることにありました。大航海時代フィリピンはスペインによって植民地化された歴史があります。アメリカにその支配が変わるまで300年ほどその支配は続いたのでしょうか。そのことに関連してフィリピン人の80%はカトリックで他のキリスト教諸派を合わせると90%以上がクリスチャンということになります。一方日本では



その時代、豊臣英世はキリシタン禁制の政策を打ち出し、徳川家康は鎖国を発令して当時の列強国の覇権を防ぎました。結果的にはヨーロッパの強国に日本が支配されてしまうことを防ぎ、日本の独立を保ったということが出来ます。

かつての時代の為政者が示したキリスト教国に対する態度は極めて日本人的な感じがします。物事を受け止めるときには、"自分をしっかり保ちつつ"自分にとって必要な部分だけを摂取するような態度です。対人関係についても同じことがいえます。自分自身でもそのことを思います。わたしたちは人付き合いが苦手で、自分が煩わしいと感じると内向的になり、引きこもることがあります。現代において、それが病的に進んでいる現象が青年や老人にもあると思います。そのことと主イエスが言われる『互いに愛し合いなさい』との言葉に関して、素直に従えず、愛することに豊かな人間になれない人間であることを嘆くことがかつてありました。

一方、フィリピンの人々は何の抵抗もなくスペインの覇権とキリスト教を受け入れ、結果としてキリスト教国になったというメリットはあったかも知れないけれど、強い国に支配されるという、わたしたちから見れば屈辱的な経験をしたとおもいます。フィリピンの人たちが他者に対して自然に心を開いて受け入れることについて今回も感じました。わたしから見ればフィリピンの人たちはごく自然に愛を示すことが出来るような感じがしました。フィリピンのハロハロ・アイスという食べものがフィリピンの人たちの人間性を表しているように感じます。わたしたちが泊まったイノセント教会信徒宅のカピタ村はおそらくフィリピンの典型的な地方の村でしょう。フィリピンの村の単位はバランガイという言葉だそうです。むかしむかし、遠いところから船に乗ってフィリピンにたどり着いた一つの船の単位が今でも共同体を表すものとなっているのです。この村でも狭い範囲に老若男女が顔をひっつけるように生活し各種動物が同居して、お互いがけんかをすることなく受け入れ喜んで生活しているのです。さらには犬、猫、鶏、豚、牛、馬、そして少し村を離れると熱帯の野鳥が木の上で歌っています。それは少子化で子どもが少なく、過疎化で老人ばかりが目につく日本の地方都市に比べると、活気があって楽園のような、あるいはノアの箱船のようなものだとなつたと思います。たとえて言うなら、それは人的ハロハロ状態で、甘みがあって多くの人があるような生活を楽しんで生きているような感じを持ちました。日本人的な言い方をすると彼らにとって"ガイジン"である

わたしたちも、彼らは数々あるハロハロの中身の一要素として受け入れ、"おいしく味わってしまう"タフな心情を持っているとも感じました。

ユダヤ人とキリスト者という文脈で聖パウロは手紙の中で『接ぎ木』という考え方を語っています。ユダヤ人が持っていた神様の選びの"木"にクリスチャンたちが接ぎ木され神様の成長にあずかっていくという内容でした(ローマ信徒への手紙11章17節以下)。私たちは日本人的なものを持って生まれていますが、接ぎ木されて神様のめぐみと力を元木から受けつつ、愛に富み、人を慰め、癒すというイエス様が持っていた属性を備えた人間に成長していくのではないかと言う希望を今回の旅行で再度確認することが出来ました。その確認の源に今回のフィリピン・ホスピタリティの経験があることは言うまでもありません。



(オシアス神学生とともに)

### (教区教育担当者) シャロンのメール

親愛なるフランシス司祭様、

フィリピンから、暖かいご挨拶をいたします。

皆さんは、既に私たちの国への旅の疲れを癒されたことと思います。夫シンビー(ダグソン執事のこと)が、リサール州タナイから持って帰ったバナナをグループの皆さんに渡すことができなくて、私たちは、申し訳なく思っています。彼がホレブハウスに行ったのは、皆さんが発発された直後でした。

私は、フィリピン中央教区の各教会へ皆さんが用意してくださった教育教材や、グループの皆さんが私たちの子どもたちを集めて指導してくださった働きに、もう一度感謝を申しあげたいのです。

私たちは、4月に始まる各伝道区の教師たちの訓練のため、既にいただいた教材を分類しました。

音楽の教本は、楽器類と同じくらい、教会の音楽担当希望者に大いに助けになると思います。4月には、私たちはバギオでも音楽の研修会をいたします。

五十嵐主教や教区のスタッフ、キャンプのメンバーや教区のみなさんに宜しくお伝え下さい。

今日のところは、これくらいです。それでは。

3月14日 シャロン・ダグソン

## 今後の展望とお知らせ

### 1. ロンメル・アデバン司祭の来日



The Rev. Rommel Adebán

昨年のシルベスター・ダグソン執事に続いて、今年は写真のロンメル・アデバン司祭がやってきます。3年前、彼を訪問したことのある牛島司祭から紹介の文章を書いてもらいました。

#### (アデバン司祭の紹介)

私は、2003年の夏にフィリピン中央教区を2週間訪問しました。その時、彼の教会も訪ねました。

ロンメル司祭は、ヌエバ・エシハ伝道区で、二つの教会二つの伝道所の牧師をしておられます。彼のいる教会がある地域は、とても貧しいところで十分な牧師の住まいも無いので、私が訪ねた当時は、奥さんと子供さんはバギオという大都市において単身赴任で働いておられました。

さて、これは中央教区の同僚司祭の言葉ですが、彼はまさしく「ファニー・ガイ」です。とっても楽しくて、そしてバイタリティーに満ちた元気で明るい司祭さんです。きっと、明るい空気を九州に運んでくれることと思います。私も彼のいる教会を訪ねて宿泊させてもらいましたが、楽しい冗談を交えながら明るく私をもてなしてくれました。

明るく楽しいロンメル司祭がこの秋に来られるのがとても楽しみです。

<記：巖原聖ヨハネ教会牛島司祭>

### 2. 第4回フィリピンワークキャンプ

今年のワークキャンプの計画をしている段階で、写真のアデバン司祭からも、自分の所でワークをしてほしい、という希望がありました。しかし、以前からの関わりが

あった、ネッド司祭(インファンタ)や、レオン司祭(ホーリーイノセンツ)からの依頼を優先して、彼の申し出は断りました。

しかし、来年もこのワークキャンプを続ける予定ですので、彼の来日などで新しい展開があるかもしれません。今のところ、次回のキャンプは、やはり来年の3月上旬を考えています。

今回のキャンプ特集についての感想や質問、意見など、お寄せください。

連絡先は、

〒862-0956 熊本市水前寺公園28-14  
熊本聖三一教会内 小林史明司祭宛  
電話&ファックス 096-384-3202  
携帯電話 090-1367-6818  
E-mail f-frank@try-net.or.jp

## キャンプスナップ



作業中のレオン司祭(ホーリーイノセンツ)



セメントをこねるタクロバオ主教(中央)





警察学校の学生たちと共に（タガイタイ）



レオン司祭夫妻（左のふたり）や、ドライバーのホリオさん（右端）と共に昼食（ホーリーイノセンツG）



教会が購入した土地の草刈り（インファンタ）



フィリピン中央教区から九州教区へプレゼント



3回のワークキャンプで、いつもフィリピンの受け入れを担当してくれているネッド司祭（インファンタで）

## フィリピンとの掛け橋は

**インターネットで読めます。**

この「フィリピンとの掛け橋」第9号は、次のアドレスで表示、印刷できます。各教会には1部配布しますが、必要ならそこからダウンロードしてください。

<http://www.try-net.or.jp/~f-frank/phi09.pdf>